

4 街にあふれるサインを読み解く

～コミュニケーション・デザインの視点から～



宮田 雅子
MIYATA Masako

愛知淑徳大学 / 創造表現学部 / 准教授

スマートフォンの地図アプリが便利になっても、やはり頼りになるのは直感的に意味がわかる街中のサインだ。サインには地域性があったり、ユニークな方法で情報が補われたりすることもある。公共空間の楽しみ方として、サインの多様性に注目してみよう。

公共空間を便利にするサイン

はじめて訪れた駅や空港で、案内図を頼りにして出口や乗り場・搭乗口を探す。そんな経験は誰にでも一度や二度ならあるだろう。公共空間で人を目的地に導いたり、その場所の意味を周囲に印象づけたりするために設置される図や文字などの記号表現を「サイン」という。施設やエリア内のサインに視覚的な関連性を持たせて体系的にデザインする場合には、サインシステムと呼んでいる。

サインのなかで示される情報には、文字だけでなく図的な記号も使われる。たとえば私たちがよく知る非常口の走る人のマークなどの図記号は、ピクトグラムと呼ばれている。非常口のピクトグラムがどこでも同じ形状なのは、偶然ではない。日本には日本産業規格 (JIS) が定める『案内用図記号』と、公益財団法人交通エコ

ロジー・モビリティ財団が公開している『標準案内用図記号ガイドライン』があり、日常的に目にするピクトグラムの統一化が図られてきた。現在も、国内外の多様な人びとにもより伝わりやすいように改定が重ねられている。またスイスに本部を置く国際標準化機構 (ISO) が策定し整備を進めているピクトグラムもある。

色彩や図形を用いたサインは、利用者により直感的に意味を伝えることができる。そのデザインは、社会的な機能をもつヴィジュアル・コミュニケーションとして発展し、今では公共の場所に不可欠なものになっている。

公共サインの発展の経緯

体系的な図記号を使った情報伝達のはじまりとして知られているのが、オーストリアの社会経済学者オットー・ノイラートが1930年代に提唱したアイソタイプ

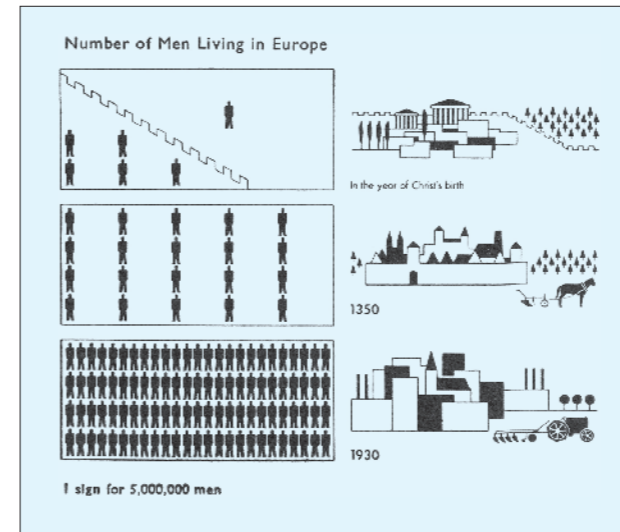


図2 アイソタイプを使った図解「ヨーロッパで暮らす人の数」(出典: オットー・ノイラート『ISOTYPE [アイソタイプ]』)

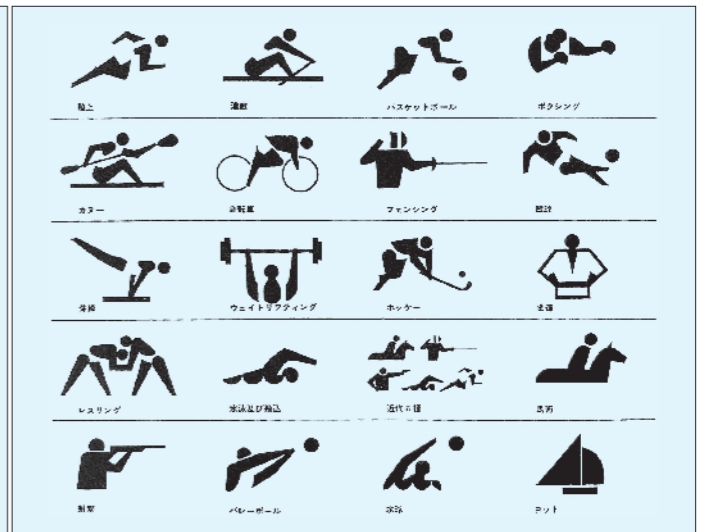


図3 東京オリンピック (1964年) の競技シンボル (出典: ダイヤモンド社『グラフィックデザイン』17号, 1964年)

(ISOTYPE) だ。社会主義運動家でもあったノイラートは教育で社会を変革することを目指し、文字を読めない移民や労働者たちに社会情勢などを伝えることができる視覚言語のシステムとしてアイソタイプを考案した。言語による情報伝達には一定の知識が必要だが、複雑なディテールを省いた単純な図記号であるアイソタイプでは、感覚的におおまかな意味を理解できるという利点があった。

日本では1964年の東京オリンピックを契機として、国家事業として体系的なピクトグラムの整備が進められた。デザイン評論家の勝見勝を中心としたデザイン室が設置され、ポスターや入場券だけでなく、競技パンフレットや会場内の施設の案内板などがデザインされた。大勢のデザイナーやイラストレーターが協働してデザイン制作をおこなうために、デザインマニュアルが作成され、さまざまなツールの視覚的な統一感が保たれるように仕事が進められた。

こうした一連の体系的なデザインの一部として導入されたピクトグラムには、競技の種目別を示すための「競技シンボル」が20種、案内所・電話・便所などの場所を案内する「施設シンボル」が39種あった。デザイナーの個性や好み、情緒性は極力排除され、単純明快な形態による造形が試みられた。

それ以降も、1970年の日本万国博覧会 (大阪万博) など国際的なイベントが開催されて海外からの訪問者が増加したことで、サインの整備は必要性を増していった。より多くの人びとに適切に情報を提供するために、ピクトグラムの国際的な標準化も重要な課題になって

いった。アジアで初の開催となった2002年のFIFAワールドカップサッカーを契機として標準案内用図記号が策定され、近年では東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けてもピクトグラムの改訂が検討された。この改訂では、国際的なピクトグラムとの整合性が意識され、海外からの観光客にもよりわかりやすいピクトグラムとなること目指されている (経済産業省「案内用図記号のJIS改正-2020年東京オリパラに向け、より円滑な移動を目指して-」)。

国や地域による違い

ではここで、実際に公共空間に設置されているサインに目を向けてみよう。どこでもまったく同じピクトグラムが使われているのかというと、じつはそうでない場合もある。たとえば非常口を示すピクトグラムは、日本で暮らす私たちは緑と白で走る人が描かれた図案をよく目にする。国際的な基準でもほぼ同一の形状が採用されている。しかし実際には、写真2のように、国によって図案は少しずつ異なり、かなり多様な非常口サインが存在している。

たとえば走る人の姿は、フィンランドのものは日本人の目から見ると少し形状が違うように思われる。しかしこれは以前からヨーロッパでよく使用されてきた図案だ。また「直進」を意味する矢印は、カナダのサインでは上向き矢印「↑」だが、フィンランドのサインでは下向き矢印「↓」が使われている。これは習慣による違いだ。さらに、緑と白ではなく、赤と白で「EXIT」の文字が表示されているサインもある。これはカナダとアメ



写真1 東京駅構内のサイン (筆者撮影)



図1 標準案内用図記号の一部 (出典: 公益財団法人 交通エコロジー・モビリティ財団 標準案内用図記号ガイドライン)



写真2 さまざまな非常口ピクトグラム (筆者撮影)
上段左から日本、日本、カナダ、イギリス。中段左から台湾、フィンランド、フィンランド、フィンランド。下段左からアメリカ、カナダ、カナダ、アメリカ

リカの一部で一般的に使用されてきたサインで、昔からあるサインがまだ残っているだけでなく、新しく設置された場所でも赤と白のサインが使用されることがある。

サインの地域性と標準化

多様なサインを見ていると、その国や地域で長く使われてきたサインを変えることの難しさを考えさせられる。見慣れたピクトグラムを急に国際標準に合わせて変更すると、非常時に必要な案内を見つけられないなど、むしろ危険な状況を招く可能性がある。もちろん安全に関わる問題だけでなく、国や地域ごとに異なるサインが使用される利点もある。たとえばサインでその地域らしさを表現できる、といった考えだ。非常口のピクトグラムをデザインした太田幸夫は、著書『ピクトグラム [絵文字] デザイン』で次のように提案している。

「はたして地域性と標準化は整合し合うだろうか。言語にも標準語と方言があるように、ピクトグラムにとって、その双方とも大切である。ターミナルなど国際交流の玄関口では、各国共通の標準ピクトグラムを使用して混乱をなくし、地方のレストランでは個性豊かな表情をデザインする。もちろん緊急性と確実性を必要

とする防災・安全のピクトグラムは都会も田舎も原則として分け隔てない」

スイスの書体デザイナー、アドリアン・フルティガーも、場所によってサインに求められる役割は異なることを指摘している。空港や駅では迅速に情報を伝えられるサインが適切だが、イベント会場などでは参加者を楽しませるサインが良いと著書『図説 サインとシンボル』の中で述べている。

国際的にサインを統一し、標準化することはたしかに有用かもしれない。しかしそれだけでは都市の多様性が失われ、退屈な景観を生み出すことにもなりかねない。そのため、サインの標準化と地域性の間でいかに折り合いをつけるかが重要な観点になる。

標準化からはみ出したメッセージ「貼り紙」

ところで、公共空間で視覚的な情報伝達をおこなうのは公共サインだけとは限らない。そこで最後に、情報を補うために追加される貼り紙について見てみたい。

写真3は地下鉄の駅構内で撮ったものだ。ホームから改札口に向かう上り階段の近くに、公共サインのほかに複数の貼り紙が掲示されている。その貼り紙の多くは



写真3 地下鉄駅のホームの貼り紙 (筆者撮影)

階段での転倒や転落への注意喚起で、よく見ると似たような内容のものが4枚もあることがわかる。朝夕のラッシュ時など、混雑する階段での事故を防ごうという意図だと想像されるが、そもそも混雑する構内で何枚もの貼り紙をじっくり読ませるのは無理ではないかと、複雑な気持ちにさせられる。だが同時に、こうした貼り紙が何枚も掲示されていることで、「この場所ではなにか気をつけなければならないことが多そうだ」というメッセージを読み取らせることに成功しているとも考えられる。

公共の場所を見渡してみると、さまざまな貼り紙を目

にすることができる。写真4にいくつか例を掲載するが、それらは多彩な工夫にあふれている。正式にデザインして設置されたサインでないため、視覚的な統一感がなかったり美的でなかったりすることも多いが、一方でその場所にどのような不便さや混乱などの問題があるのかを読み解く手掛かりにもなり、興味深い。

デザインの視点から見る公共空間

時間をかけて検討しデザインされてきた公共サインから、素人らしさのある貼り紙まで、公共空間には多様なメッセージがあふれている。国際標準に偏りすぎたサインは都市を均質化させるが、実際には国や地域によって異なるデザインがあり、必要に応じて追加や改訂が加えられるなどの変化もある。公共サインが設置された時点でその空間が完成するのではなく、公共空間はその場所を利用する人びとによって常に書き換えられ、変化しながら生成されていくものだといえるだろう。言い換えれば、空間の利用者である私たち一人ひとりが、その空間をつくっている主体だともいえる。そんな目を持って、毎日見慣れている駅やデパート、道路などの空間を見てみてはどうだろう。コミュニケーションの多様性と豊かさを、あらためて発見できるのではないだろうか。



写真4 さまざまな貼り紙 (筆者撮影)